Title	阿蘭陀通詞　志筑忠雄の思想 ： 近世日本における統一的宇宙観の展開
Author(s)	久保，誠
Citation	2013 年度　博士論文 要旨
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2013 年度

博士論文・要旨

（指導教員　　鵜沼裕子教授　清水正之教授）

阿蘭陀通詞 志筑忠雄の思想

近世日本における統一的宇宙観の展開

聖学院大学大学院

アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科

（博士後期課程）

学籍番号　108DC002　　久保　誠

【博士論文の要旨】

17, 18 世紀のヨーロッパ出版印刷本が、鎖国下日本における知識層にどのような影響を与えたかという問題意識が本論の研究を始めるに至ったそもそもの原点である。15 世紀半ばにヨーロッパで起こった印刷革命による印刷術の伝播は、当時の社会構造や文化に劇的変化をもたらし、16 世紀の宗教改革にも少なからず影響を与えた。17 世紀にはオランダ、ベルギーなど低地地方で挿図を含んだ印刷物が多く印行された。この時代はケプラー、コペルニクスによる地動説やニュートンの万有引力など科学上の発見が印刷物によって広められた時代でもあった。

鎖国下にあった 17, 18 世紀の日本は、海外から日本に入る物品制限はあったものの、徳川吉宗の代になってキリスト教書を除く洋書輸入が解禁(1720 年)されたことで、多くの洋書印刷本が日本に入っている。ヨーロッパから長崎出島を通して輸入された科学書を中心とした洋書群に、最初に触れることが出来たのが長崎阿蘭陀通詞であった。阿蘭陀通詞は長崎の下級役人の職にありながら、極端な情報統制下にあった時代、書物をとおして世界情勢はもとよりヨーロッパの学問に触れ、翻訳をとおしてそれらを自らの言葉で表現し、国内の知識層に伝播させた貴重な存在であった。

本研究ではこの阿蘭陀通詞のなかでもとくに偉業をなした志筑忠雄（中野柳圃）の思想について考察する。志筑はオランダ語に通じ、物理、天文、博物学などの広い範囲での訳書や自著を残している学究肌の阿蘭陀通詞である。志筑は、コペルニクス「地動説」やニュートンの「万有引力の法則」を翻訳により日本に紹介した人物でもある。

翻訳にあたり、原語の意味を理解したうえで日本語に存在しないことばを創出し、いかに原語の語義を表現するかということに関して、通詞たちの想像力・理解力が求められた。ヨーロッパ科学革命の中心を担ったニュートン力学を翻訳するにあたり、恐らくは志筑もまた多くの困難に直面したとが考えられる。「引力」「求心力」「遠心力」「動力」「弾力」「速力」「物質」「分子」「真空」など今日我々がごく普通に使っている物理用語は、志筑が義訳、つまり創作した言葉である。

阿蘭陀通詞についてはこれまでも科学史、翻訳論、洋学、蘭学研究の各方面から研究がなされてきたが、彼らが受容した洋学の思想的観点からの本格的研究は未開拓である。阿蘭陀通詞たちが翻訳をとおして、どのように西洋科学思想を受容し、自分たちのものにしていったかについて、阿蘭陀通詞のなかでも傑出した存在である志筑の残した仕事から探

ることが本論の目的である。

序章・第 2 節「志筑忠雄についての先行研究」では、歴史学研究、オランダ語学研究の各方面より史学者や科学者によってなされた研究史を振り返った。その際、これまであまり注目されなかった数少ない思想史分野の業績にも留意した。

第 1 章「志筑忠雄研究の背景」においては、志筑の生きた時代、すなわち近世後期の鎖国時代に洋学受容がどのように行われたかを概観した。西欧の先進的科学技術に関する多くの洋書がオランダから長崎に舶載され、長崎出島というごく限られた場所において阿蘭陀通詞や蘭学者たちがそれらに触れることができた。天領長崎という特殊な場所において幕吏としての阿蘭陀通詞の仕事をその職制から概観した。

第 2 章「志筑忠雄の生涯」では、限られた史料から現在までに判明している志筑の人物像について概観した。志筑の生没年は、『長崎通詞由緒書』や中野家菩提寺、光永寺過去帳の記載から明らかとなっているが、歴史学における先学の研究成果に加えてごく最近判明した中野家系図に中野忠次郎(志筑忠雄の中野姓名)の名がみられることについて触れた。加えて第 2 節「長崎という視座」では、長崎の歴史を概観し、キリシタン時代にイエズス会宣教本部が置かれポルトガル、スペイン人たちが多く出入りした時代から徳川政権以降、天領として幕府直轄治制のもとオランダとの貿易都市として栄えた幕末までを概観することで阿蘭陀通詞たちが生きた長崎の特殊性について述べた。

第 3 章「志筑忠雄の事績」では、志筑の著書について分野別にその特徴を概観した。志筑の著作は写本で伝本しており、それらが生前に刊行されることはなかった。書写された 50 余の著作は、物理・天文学、オランダ語学、地理・外交の 3 分野に大別することができる。当時、多くの蘭学者、通詞たちの関心は、医学、本草、兵学、外交などの実学的な分野に向けられていたのに対し、志筑の学究的関心は物理・天文分野に向けられた。志筑写本の約半数が物理・天文分野であることからもそのことは明らかである。第 2 節では、志筑が天文・物理学分野に属する『奇児全書』に独自の論考を加えながら訳出した畢生の書『求力法論』、『暦象新書』を取り上げ、底本との関係を一覧表で示した。

志筑思想を探るうえで本研究の中心となる第 4 章「志筑忠雄の宇宙観」においては、志筑の主著『求力法論』、『暦象新書』を取り上げ、テキストの吟味・分析を通して彼の宇宙観の解明を試みた。これらの書の底本は、 J.カイルの著したラテン語原著をライデン大学天文学教授の J.ルロフスがオランダ語訳した *“Inleidinge tot de waare Natuur-en*

Sterrekunde of de natuur-en sterrekundige Lessen" / Johan Lulofs -- Leiden, 1741.（原著名：*"Introductiones ad veram Physicam et veram Astronomiam"* / Joannis Keill - London, 1739） である。この書は自然界の成り立ちとその多様な現象を、粒子とその間に働く引力によって説明したものである。こうしたニュートン力学の考え方は当時の日本には存在せず、西欧科学の根底にある機械論的自然観も当時の日本知識人たちには未知のものであった。志筑は訳出にあたり随所に「忠雄曰く」で始まる補説を付しており、彼の独自思索の深まりを窺うことができる。多くの先行研究では、志筑の宇宙観の根底には陰陽五行論があるとしている。しかしながら「気」と粒子は本来相容れない存在であるうえ、志筑の時代には陰陽五行論はすでに形骸化していたので、上記のような解釈は、必ずしも妥当ではないと筆者は考える。

第 4 章・第 1 節「『求力法論』」では、『求力法論』の構成と内容を概観し先行研究を踏まえつつ、志筑が「陰陽五行論」や「気」の背景から粒子論的なニュートン物理学を捉えたと仮定するのが必ずしも妥当でないことについて問題提起した。『求力法論』は第一按から第三十按の構成となっている。第一按から第八按ではニュートン粒子論の中心となる三基（真空、無限分割性、万有引力）について総論している。三基については今日の物理学にあたる格物学（自然学、自然哲学）の根本にあるのが三基であるとして志筑は独自の解説を加えている。第九按から第十五按では、物体の内部組織は同一でないために様々な物理現象が存在することを論じている。第十六按から第三十按では物質を成り立たせている粒子の流動性や凝集、弾性に触れ、結晶、醗酵、沈殿、凝結といった現象について求力（引力）により独自の解説を加えている。

『求力法論』で用いられている志筑の造語「求力」とは、ニュートン物質論における粒子間力のことである。カイル書においては微粒子間に働く求力と斥力（反発力）により自然界の様々な現象がニュートン粒子論の立場から説明されている。志筑が底本としたカイル書で解説されているニュートン粒子論は、化学的変化を含めた自然現象を、等質の力学的粒子運動で説明することを試みた物理モデルである。そうした全ての自然現象を力学的粒子運動に還元しようとする試みは、まだヨーロッパにおいても十分に数式化、定量化できないテーマであった。カイル書蘭訳本をとおして志筑がいかにニュートン粒子論を理解し、それを自らの訳書に託したかについて『求力法論』本文から辿った。

第 2 節の「『暦象新書』」においては、まずコペルニクスの地動説、ケプラーの法則、作用反作用、万有引力、慣性などニュートン物理学の諸法則に志筑独自の補説が加えられたテキストの吟味・分析を行った。上編では、重力によって地上に束縛されている人間が、心身ともに解き放たれて天体側から万物を観るという奇抜な着想である「心遊術」に注目し分析を行った。中編では、引力論の成り立ちが「不測」であるする志筑の問答を通してその宇宙観を探った。併せてここには、「引力の引力たる所以」、すなわち物理法則の背後にあってこれを支えるものに対する志筑の根源的な問いかけがあることに注目し、それが何であるか探ることを試みた。

第 3 節では、第 1 節、2 節で考察した『求力法論』、『暦象新書』の本論文における意義について小括した。ニュートン力学受容者としての志筑がどのような宇宙観を展開させたかについて述べることで、第 4 節への手がかりとした。

第 4 節で取り上げた「混沌分判図説」は、志筑の独創的な宇宙観の集大成と位置づけることができる。『混沌分判図説』にはこれまで、カント・ラプラス宇宙論にも匹敵する志筑の独創的太陽系起源説としての評価が与えられてきた。先行研究の多くは、ニュートン力学に触れた志筑が伝統的陰陽論を背景に持ちつつ、「気」と「引力」を用いて宇宙起源を追究したという独創性への評価が殆どであった。本節では先行研究で取り上げられることのなかった「大気」、「太虚」、「神気」、「神霊」など、『暦象新書』の随所に表れる語の吟味分析・解釈をとおして、物理法則の背後にあってこれを支える存在について、志筑がキリスト教の超越的一者を想定していたことが明確であることを結論づけた。

終章では、志筑忠雄研究の今後に期待される課題について展望した。とくにキリシタン諸文献と志筑著書との思想面での関連性については今後の研究課題とした。志筑の思想を探ることは、鎖国下における異文化受容、さらに、近世から近代への思想史研究にも資するところがあると考える。

聖学院大学大学院

アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科

（博士後期課程）

学籍番号　108DC002　　久保　誠